

学 位 論 文 要 旨

氏 名 河 合 篤 史

題 目 識字学級に通う中国人渡日者の心理的援助に関する研究
～共同生成される語りを通して～

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

識字学級に通う中国人渡日者に焦点を当て、そのライフストーリーを読み解くべく本研究を進めていった。

第1章では、本研究の問題と目的を論じた。まず、夜間学級・識字学級に通う生徒は、戦争や経済的理由等で学校に通えなかった歴史がある。さらに、近年「ニューカマー」と呼ばれる渡日者が多数通っており、国際化する日本社会において看過できない問題であることが示唆された。次に、夜間中学・識字学級の歴史を概観した。その中で、渡日者に対する排除の論理が浮き彫りとなり、彼らがマイノリティとして日本社会で生きる困難さが示唆された。さらに、渡日者のメンタルヘルスの悪化、その対策が今日的課題であることを論じた。そして、本研究でインタビュー調査を行った識字学級を対象とした先行研究を概観した。その結果、識字学級を対象とした研究そのものが少なく、さらに心理臨床学的な観点の研究は、筆者らの研究以外になく、本研究の意義を改めて確認することができた。

第2章では、研究の方法について論じた。まず、ライフストーリー研究法を用いる意義および聞き手と語り手の間で共同生成される語りの重要性を論じた。本研究が識字学級に通う渡日者とのインタビューを通して、人生および識字学級での学びの意味づけを丁寧に探っていくことが目的であるため、ライフストーリー研究を採用した。また、共同生成される語りを通して、当事者の内実の深淵を掘り取ることが可能となり、当事者自身の人生を深く丁寧に解釈するための最良の研究手法であることを論じた。次に、筆者の立場を明確にし、研究協力者との関係性を論じた。本研究が、一方的にインタビューした内容を分析するのではなく、筆者と研究協力者との間で生成されたライフストーリーを分析することの重要性が示唆された。さらに、インタビューにあたっての倫理的配慮について論じた。最後に、本研究における分析方法について論じた。本研究では、シークエンス分析を採用した。具体的には、インタビューで交わされた会話を全て忠実におこし文脈の流れを読んでいくことになる。インタビュー過程がインタビュアーとインタビューイの共同作業的な構築過程であり、研究協力者の語りだけでなく、筆者の語りを含む共同作業全体を分析・考察することが重要であることから、シークエンス分析を行うことにより、識字学級に通う中国人渡日者の内面に焦点を当てることが重要であることが示唆された。

第3章では、筆者と研究協力者とのインタビュー内容を分析・考察を行った。また、研究協力者4名の

各単一事例ごとに分析・考察した。単一事例として研究する意義は、複数の対象者から得た「データとしての語り」を分析することによる、抜け落ちてしまう当事者の思いについても焦点を当てることが可能となることである。その結果、当事者の内実の深淵を掬い取ることが可能となり、彼らの人生を深く丁寧に解釈することができた。考察の結果、渡日者にとって識字学級が心安らぐ場所として機能していることが明らかとなった。

第4章では、研究協力者各4名の「転機の語り」に焦点を当てて、総合的に分析・考察していった。具体的には、研究協力者との半構造化面接を通して、彼らがどのような心理のプロセスを経て日本で生きていく人生を選択するに至ったのかを明らかにすることを第一目的とした。そして、彼らの人生の中で、識字学級をどのように意味づけるかを検討し、渡日者の心理的援助の可能性を明らかにすることを第二目的とした。その結果、彼らの語りは、①「渡日の決心」、②「日本での生活」、③「識字学級への参加」の3つの転機に分けられた。そして、聞き手(筆者)と語り手(研究協力者)の間で共同生成された語りのプロセスは、渡日者への心理的援助につながる可能性が示唆された。

第5章では、これまで不可視であった渡日者が日本で生きていく困難さについて、本研究で導き出された結論を述べた。結論は次の4点に要約された。すなわち、①渡日者にとって識字学級が「安全基地」として機能している、②彼らの語りは、1. 「渡日の決心」、2. 「日本での生活」、3. 「識字学級への参加」の3つの転機に分けられ、未来に繋がっていく、④渡日者の公的なサポート体制の構築が真の国際社会に繋がる、である。

第6章では、本研究の限界と今後の課題について論じた。本研究では、筆者と研究協力者の関係の中で紡ぎ出される物語を検討することができた。そして、日本人が渡日者の苦労を理解・尊重し、ライフストーリーを共同生成するプロセスが彼らの生きる意味づけや心理的援助に貢献できる可能性も示すことができた。しかし、この結果は少数の対象者から得られたものであり、一般化することは難しい。今後は、①他の事例についても同様の分析を進めていくこと、また、②量的研究も行うこと、を通して研究の一般化に繋げていく必要もあると考えられる。さらに、心理的援助を潜在的に求めている識字学級に通う渡日者に対する、援助システムの構築に向けた研究も今後の課題であると考えられる。

第7章では、第5章の結論に基づいて、「識字学級」で学ぶ渡日者への心理的援助および学習サポート体制について提言を行った。すなわち、①公的資金の投入、②学生のボランティアスタッフの充実、③渡日者の心理的援助の充実、という3つの事項が必要とされており、そのことは真の多文化共生に繋がるとともに、ひいては日本の学校教育の再生にもつながると期待される。